

二宮尊徳翁像

「報徳の人」二宮尊徳— 幼名 金次郎 —は、天明七（1787）年に相模国（現在の神奈川県小田原市）で生まれた。早くに両親を亡くし伯父宅に身を寄せるが、逆境にもめげず家事の手助けをしながら幼い兄弟を育て勉学にも励んだ。市内の小学校に今も残る薪を背負い読書をしながら歩く「金次郎像」は此の頃の姿を想像し作られたものである。

また、この時期に、捨てられた稲の苗や菜種を空地で栽培・収穫し、毎年その量を増やし、やがて失った両親の田畑を買い戻す中で、彼の生涯における基本理念の一つとなる「積小為大（小さな努力の積み重ねが、やがて大きな収穫や発展に結びつくこと）」を学び体得したと云われている。

更に、後年は農政家として数多くの農村の復興に携わり、その手腕を買われて藩の財政再建をも成し遂げて行くが、その手法としたのが「報徳仕法」であった。 即ち、

- 至誠 真っ直ぐで思いやりのある心
- 勤勞 生活の基本として一生懸命に働くこと
- 分度 自分の収入の枠内で、それに相応しい生活をする
- 推讓 働いて得た余分は社会のために進んで譲ること

の考えに立った実践により難題に取組み解決していったのである。そして、「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は戯言である」に表われる尊徳の思想は、時代を経て近代日本を主導した渋沢栄一、安田善次郎、豊田佐吉、松下幸之助、土光敏夫ら多くの経済人も学び実践したと云われている。

これからも、“道徳”の心を育てながら“経済”発展の礎を築いた二宮尊徳の思いが、“私たちが愛し大切にしたいこのまち”でも受け継がれていくことを願い、創立80周年を記念してこの像を建立する。



平成 25 年 3 月

敦賀信用金庫